

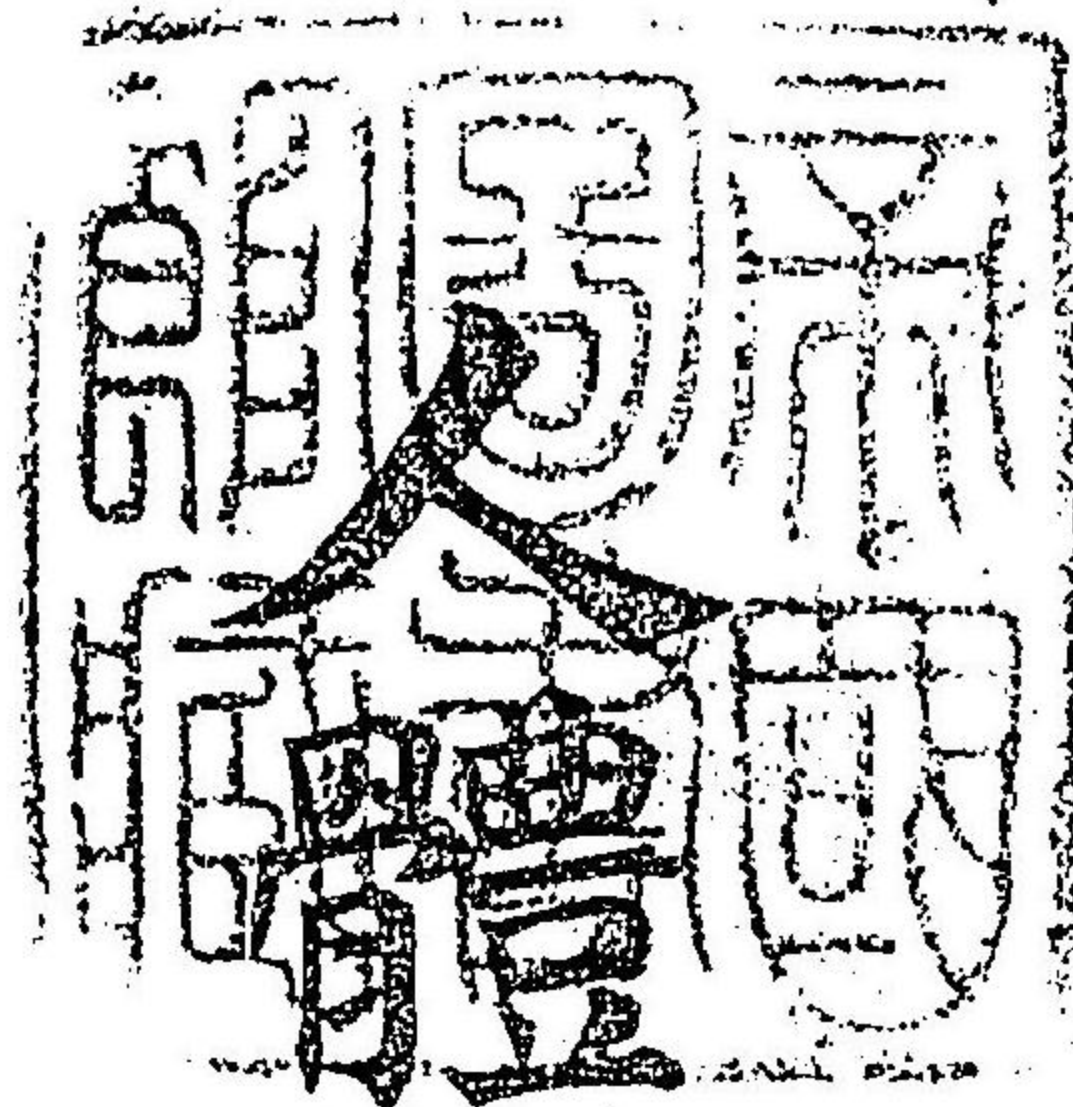
187

353

人

體の
善
虫

全



の害虫

全

明治
37 11 7
内交

緒言

從來蟲と云ふ字は、昆蟲でない者にも博く用ゐられ、蚯蚓、蚰蜒、蜈蚣、馬陸、蛔蟲、條蟲、其他魚鱈、蛟龍の類までも、蟲の類と見做して居たが、蟲は重もに昆蟲、又六脚蟲とも云ふの總稱にて四枚の翅と、六本の脚を具ふるものである。さて昆蟲は、世界中産せざる所なく、其數も實に夥く、之を算ふることは、到底六ヶしい。昆蟲は水陸共に生活するものなるも、水に棲む者よりは、陸に棲む者が遙に多い。野外に居る昆蟲は、林樹、果樹、庭樹、穀稷、蔬菜等の葉、幹、枝、皮、根等を蝕して、吾人に間接損

害を加ゆることが甚しい。夫れのみならず、昆蟲には吾人の身體に直接患害を加ふる者も、決して少なくない。吾人が平素患害を受けつゝある昆蟲は、知れわたつて居りながら、其性質、習慣、豫防、驅除等の方法も心得なくて、徒らに昆蟲の虫害に罹り居るとは、實に歎かほしき次第ではないか。今や余は各地に於て直接に吾人を惱ませる害蟲類を拾ひ集めて一小篇となし、人體の害蟲と名け、虫害を憂ふる者の資に供せんことを希望するのである。

明治三十七年十月

著者識す

目次

第九	蚤	圖入	五一
第八	南京蟲	圖入	三九
第七	毛虱	圖入	三五
第六	虱	圖入	二九
第五	人體の寄生蠅	圖入	二六
第四	家蠅	圖入	一七
第三	ブト	圖入	一三
第二	アノフェレス蚊	圖入	九
第一	蚊	圖入	一

目次

第十	蜂類	五九
第十一	蛾類の幼蟲	六二
第十二	蠍	六四
第十三	疥癬蟲	七〇
第十四	水蛭	七二
第十五	山蛭	七五
第十六	有鉤條蟲	七九
第十七	裂頭條蟲	八二
第十八	蛔蟲	八五
第十九	蟻蟲	八七
第二十	ヂヌトマ	八九
附	除蟲菊	九二

圖入

人體の害蟲

理學博士 佐々木忠次郎著

昆蟲類は獨り林樹果樹穀稷蔬菜等に集りて間接に吾々に害を加へる許りでない。直接に吾々に患害を加へる蟲類亦多いのである。その直接の害蟲類を記するも無用の事ではあるまいと思ふ。

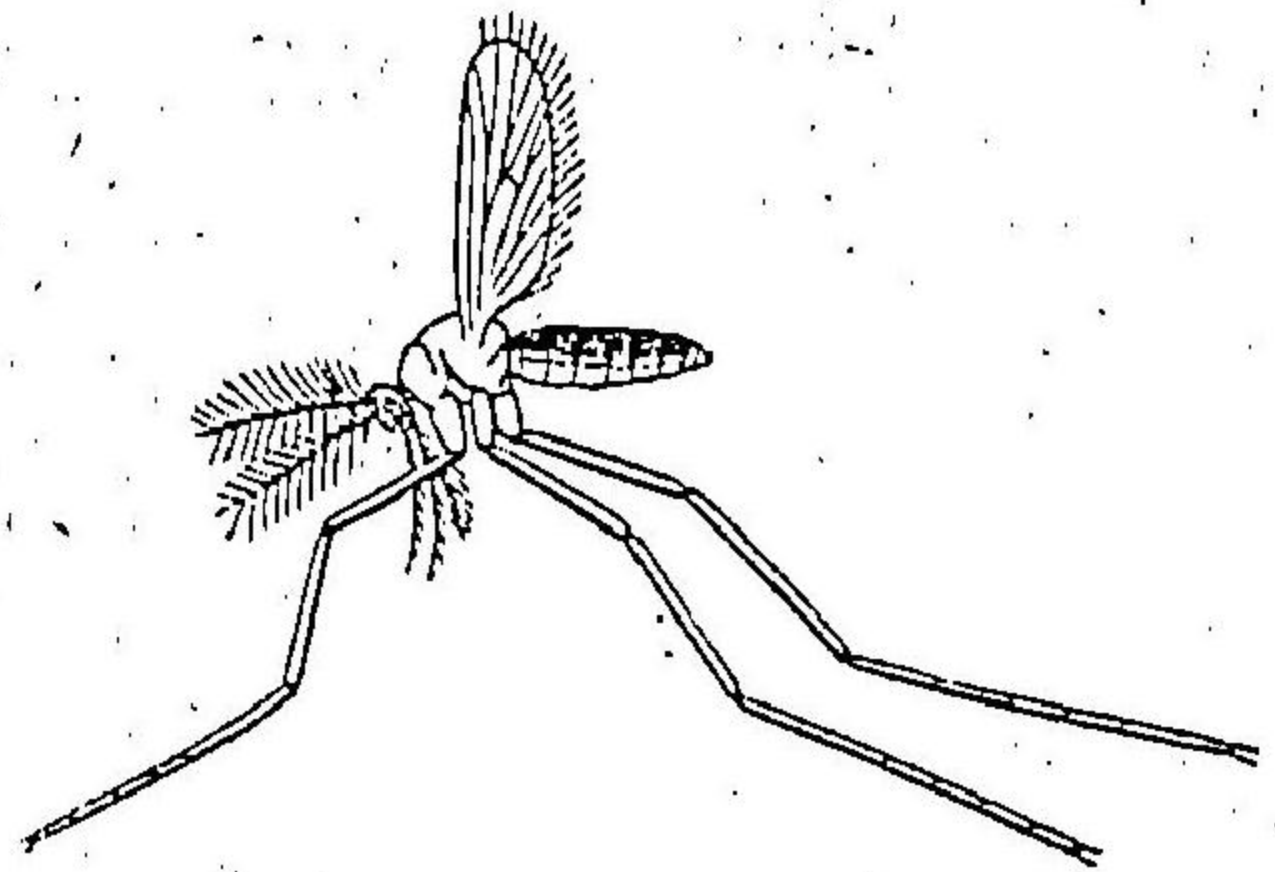
第一 蚊

蚊は何れの邦にも産するもので、夏になると、何人も其

第一 蚊

ために苦められる。普通の蚊は、單に血液を吸取して、痒みを感じしむるに止まるが、一種アノフェレス蚊と稱ふる者になると、血液を吸取すると同時に、間歇熱の病原を体内に移し容れる。其ため間歇熱病に罹るといふ様な患さへある。普通の蚊は、世人の熟知するものであるから、説明する要はない様なものゝ、今其の大體の事を記する。體は灰褐色で、脚は極めて細長い、恰もカノウバ(又カカンボ)と云ふの小形なるものと見做してよい。頭には二本の鬚があつて、之に細い毛が幾回となく、環形に生えて居る。此毛の長いものは、雄蚊で短いものは、雌蚊であ

る。翅は二枚あつて、長くまた幅狭く、翅の縁には、鎗形の毛が並列して居る。皮膚には普通の毛の外に、多く團扇



(圖原)(倍三)蚊

形の毛がある。若し掌で蚊を打殺した時、必ず粉末のやうなものが手につくが、特に蚊などを打殺した時は、殊に著しく附着する。これは右に述べた、鎗状若くは團扇形の毛である。蚊はどういふものから、化生するかと云ふに、所謂停水溜水、溝渠、天水桶などのうちに、浮沈して居る。子子の變化せるもので、その

子子は親蚊が水面に産み落した、卵子から孵化するのである。親蚊が水面に来て産み落した、數十若くは数百粒の卵子は普通舟形の卵塊となりて、水面に浮いて居る。其色は灰色であるから、丁度塵や埃が水面に浮いて居るやうで、餘程區別し難い。それが孵化すると、子子になりて、水の中に沈むやうになる。併しそれが呼吸をするため、時々水面に浮き上る。其時は必ず尾の端を、水面に挺出するものであるが、これは呼吸器が尾端にあるため、それで大氣を吸ふのである。子子の棲んで居る水の中には、頭の大きな子子と同じやうに、浮沈するものがある。

これは子子の蛹である。此者の呼吸器は、尾端にはなく、其背にあるのであるから、水面に出た時は、尾を振り出すに、其背を持上げる、其特徴で子子と蛹の區別を知ることが出来る。

右のやうに、子子は停水、溝渠等の中に棲息するものであるから、若し天氣續きて水の涸れたる時などは、其居所を失ふて死滅する。其ため蚊の数が減少する。だから人家稠密、餘り水氣のない排水の行届いた所では、自然蚊を見る事が甚だ罕である。併し雨水の停溜した窪みなど、棲む子子は、假令其水は滅却しても、窪みの濕潤して

居る間は、なかく死ぬるものではない。雨さへ降れば
再び盛んに發育して蚊に化生する。

元來吾々の血液を吸ふものは、重もに雌である。雄は
例之ば上戸下戸を兼ねるといやうなもので、酒類糖蜜類
に聚まりて、これを吸取する。併し血液を吸取すること
は好まぬらしい。

蚊を豫防驅除するには、家屋の内外に於てせなければ
ならぬ。屋内で蚊を驅除するには、杉葉其他松、杜松等の
薰烟を使用し、或は種々の蚊やり粉の薰烟を使用するも
よいが、除蟲菊の粉末を焚き、それから發散する薰烟で驅

除するのが最も有効である。さて蚊の來襲を全く免れ
うと思ふなら、先づ室を閉ぢ、障子一枚位を開けて置き、小
皿を採つてそれに四摘み又は五摘み許の除蟲菊粉を入
れる。そうしてそれに火を點じて置く、そうすると蚊は
悉く開放した所から逃れ出て、室内に留まるものはない
やうになる。全く驅逐し終はるとき、障子を閉ぢさへす
れば、最早蚊に襲はれる恐れはない。然し此方法は、少々
暑氣に堪ゆる人でなければ、實施し難いけれども、障子を
寒冷紗で張て置きさへすれば、風氣を通じて暑氣に惱む
の患はない。或る地方では、蠶糞の乾かしたのを焚いて

驅逐する。また支那では、松、杜松等の鋸屑に、少量の硫黄と砒石とを雜せて、之を細長い囊に詰め込み、其一端に火を點じて、蚊を驅除する。また蚊に刺されて、痒氣を覺えた時は、リスリンを塗り付けければ直になほるといふ説もある。

室外に於ける豫防驅除の方法にも、亦種々ある。その重なるものを掲げると左の通りである。

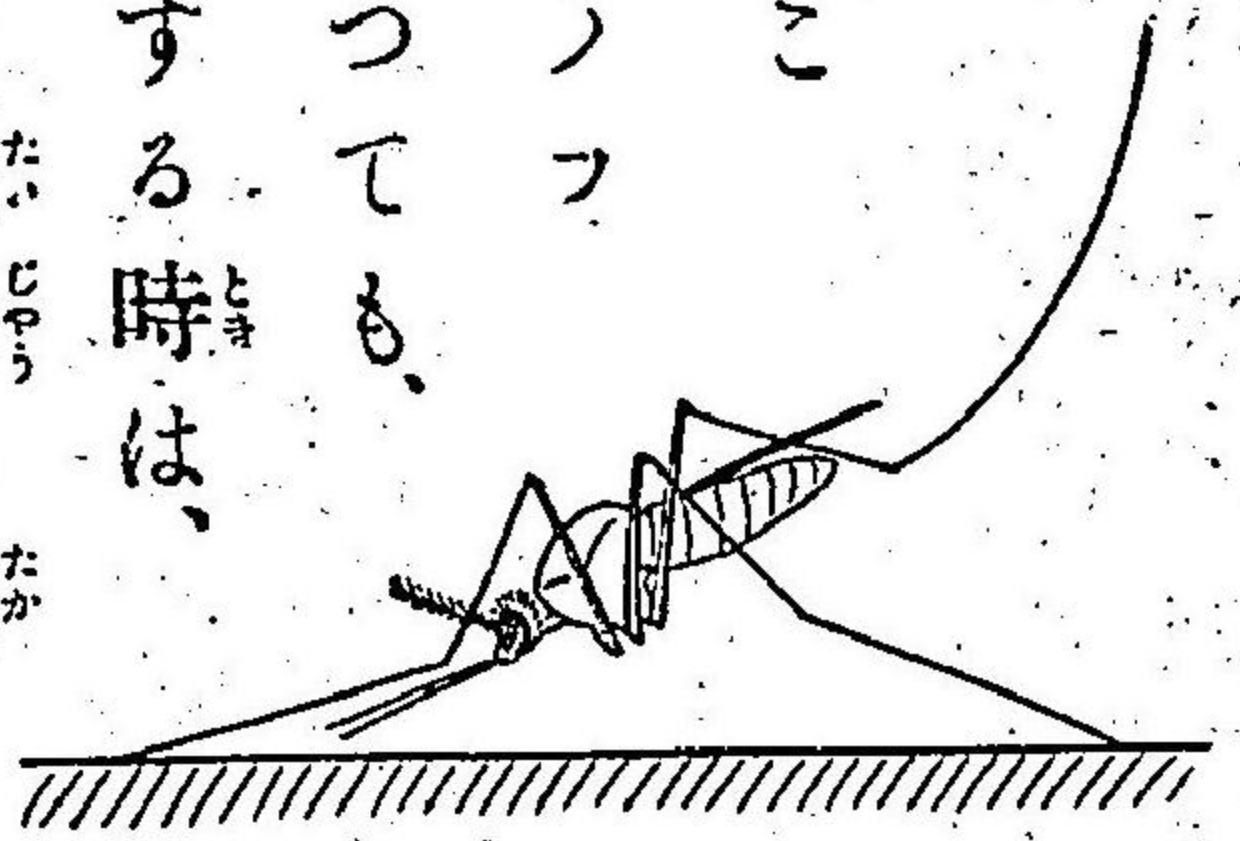
停滞した水を除いて、排水法の宜しきを得さへすれば、蚊は自然に滅却する。また子子の蕃殖に適した池溝渠等のある時は、之に魚類を入れるとよい。魚類は好んで

子子を食ふ物であるから、自然に驅除することが出来る。又子子の蕃殖した水面に、石油を浮べるか、或はパラフィン蠟を溶した物を落すと、同油の薄層を水面に生ずるが、斯くすると子子は水面に出で、自由に呼吸することが出来ぬため、多く斃死する。又子子の蕃殖に適した場所の排水を全くして仕舞へば、之を豫防驅除する效は、他の方法に比べて最も價值がある。

第二 アノフェレス蚊

アノフェレス蚊と云ふのは、矢張普通の蚊に似て居る

が雌雄の口部にある、下顎鬚と云ふ鬚が細管のやうな口吻の長けと殆ど均しいため、之を他種の蚊と區別するとは容易である。尙ほ普通の蚊と、アノフェレス蚊とは、休止して居る位置にあつても、區別ができる。即ち普通の蚊の休止する時は、體を地平に横へて、後脚は地に着けず、體上に高く上げるのであるが、アノフェレス蚊は、頭を下にして胸部を直立し、所謂「シャチホコ」云ふ様な位置をして、さうして矢張後足は、地に接せず、居るものである。



蚊スレエフノア (ふ従に氏すうは1た1わ)

アノフェレス蚊は、所謂「間歇熱」即ちマラリアの病原を、体内に導き入れる媒介者であつて、最も悪むべき恐るべき蚊類である。故に「間歇熱」流行の地には、必ず此種の蚊を、發生するものである。さて此蚊の幼蟲子は、停水沼池を初めとして、谷川などにも棲み、小さな水草などを食うて居る。

間歇熱の病原は、プラスモデアムと云ふマラリア寄生蟲であつて、極めて小さなものであるが、其始めはアノフェレス蚊の胃中に在りて蕃殖し、遂に蚊の口の側らにある唾腺(つばき)を醸生するところに入り込み、夥多の鎌形の

芽を生ずるやうになる。故に此蚊が人體を刺す時には、右の鎌形の芽は直に血液中に入り込んで、益々蕃殖増加し、其結果間歇熱即ちマラリアを發作すると云ふことになる。

アノフェレス蚊にもまた、あまたの種類があつて、大抵何れのところにも居り、普通の蚊にも雜つて飛ぶ故に、マラリア流行の怖れのある時には、其特徴に注意して、可成刺されぬやうにするが、肝要である。固より間歇熱に罹つた時は直に醫に治療を乞ふが必要であるが、それが蚊の媒介によるや否やといふことを、よく探索して、其他の

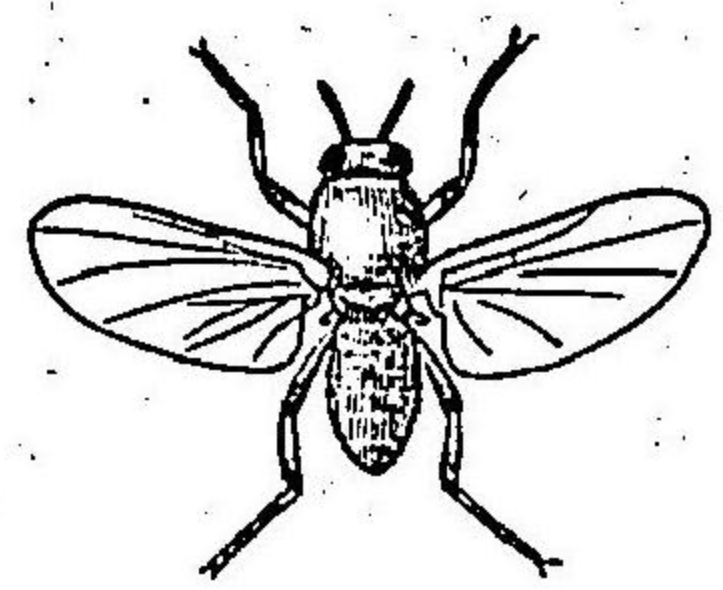
者の同病に、罹らぬ用心をせねばならぬ。

第三 フト

「フト」「ハ」「ブドウ」「ブユ」蟻子又は蚋子と稱へ、極めて小さな藍黒い蟲にて、夏日は多く庭園、田圃、草叢などに匿れ、晝間出でて人の手足に止まり、血を吸ふ惡蟲である。

此蟲は雌雄で大きさが違つて居るが、先づ小なる者は七厘位で大なる者は一分二厘位もある。斯く體は小さいけれども胸部は大きくつて、其背面は腫れ上り、頭は體の割合には小さくして、背面より見る時は、其半ばは胸に

て覆れてあるが、口には鎗の如き口具があつて、能く刺し能く血を吸取るものである。翅は二枚あつて透明であり、體の割合には幅が廣くて長けが短い。



(圖原)(倍五)トブ

右の如く「トブ」は體は小さくて藍黒であり、翅は透明であるから、飛んで居ても、中々認め難い。

「トブ」は晝間にのみ出でて、人の血を吸ひ、夜は匿れて、出づることがない。特に曇天の時には多く出でて人を襲ひ、晴天の時には、出で來ることが少ないが、尙ほ朝夕には血を吸ふために常に稼いで居る。

「トブ」の幼蟲仔蟲は、水中に生活するものにて、水中に横つてある石や木の葉や枝などに止まり、植物質を食し、成長するものである。幼蟲の頭尾の兩端には、吸盤の如きものがあつて、之にて物に吸付き、歩むものである。また頭には二個の大きな扇形のものがあつて、之にて食物を撮り口に送り、尾端にある細き絲にて製したる、蘇流の如きものは、氣管總と稱へ、水にて呼吸する道具である。「トブ」が手足などに止まるも、初めの程は一向分らないが、充分に血を吸ひやがて、手足より離れやうとする時に至り、初めて其螫したる所は、痒氣を覺え、之を搔けば、忽ち

腫れふくれ、人に依りては團子の如く腫れるものがある。
加之「ブ」に蝨されたところは数日の間痒く、特に曇天
の時には痒味が一層甚しい。

此蝨の害を免れやうとするには、可成手足を纏ひ、露出
せぬやうにするが宜い。然し農家の人々が、田や畑にて
働く時などには、手足を纏ふことが出来なことが多
其時には襪褌切れを丸め、火を點じたるものを携へ、これ
より絶えず薰烟を發散するやうにすれば、「ブ」は決して
寄付かぬものである。また手足などに、魚油「テレピン」油
などを少し許塗つて置かば、亦此蝨害を免るゝことがで

きる。

第四 家蠅

家蠅は何人も熟知する昆虫で、夏日は多く家内に入り
込み、特に臺所などには群棲して各種の食料に止まり、之
を甜めては何の遠慮會釋もなく糞をなすものであるか
ら、家蠅の澤山に居る臺所で料理した食品は、實に心地が
わるい。また家蠅は人の顔や手足などにも多く飛んで
来て、無暗に皮膚を甜める。特に眼鼻口邊を甜られて、う
るさいこと此上もない。若い者の頭には、餘り家蠅は寄

り付かぬが、年寄の禿頭は、よく甜めに來るもので、老人の常に口小言を絶たぬものである。殊に晝寐などをすれば、家蠅の來襲が一層多くて、眠りに就くことがむづかしい。但し家蠅が晝寐を妨げるのは、吾々を苦めるてはなくて、長い夏の日もたゆまず働け勉強をせよと、忠告するものであらうと思ふ。幸に本邦の家蠅は晝のみ出るが、滿洲地方では夜も盛んに出て、我出征軍を惱ますことが、中々甚だしいと云ふ事である。これはちと忠告が過ぎたりと思ふ。

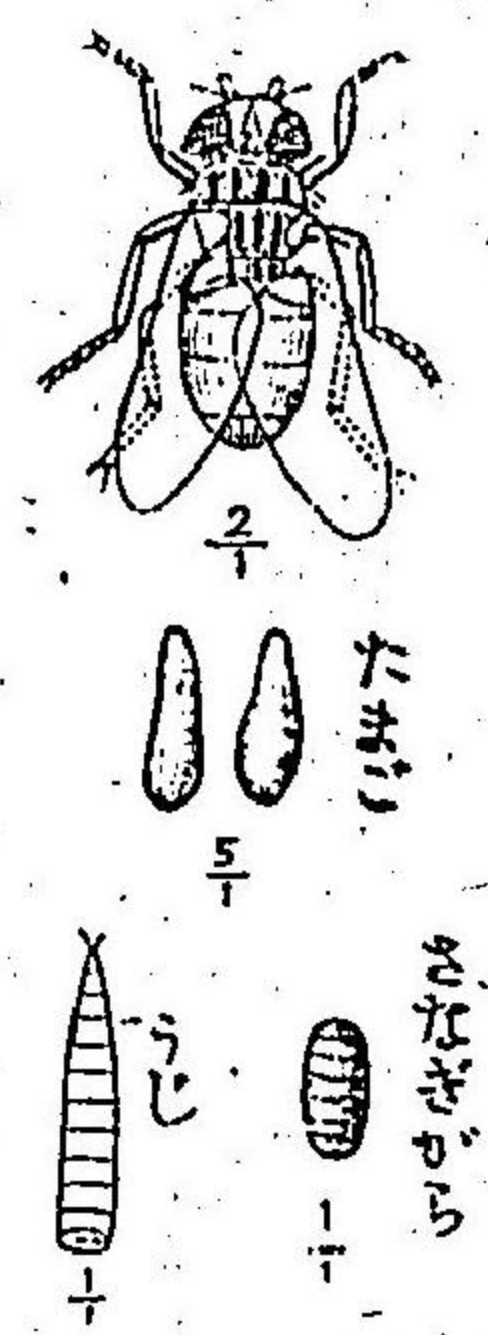
家蠅は長けは二分五六厘ありて、頭は黒く頭の左右には、暗赤褐の大きな眼があり、頭の前面には二本の扁長な鬚があつて、此鬚に一本の羽毛に似た毛を生じて居る。口は管の様に變じて、頭の裏面に横はり、口の尖には扁圓な舌がある。舌の中央には一本の縦筋があり、此筋が蝶鈹になつて、舌を疊み合ふことが自在である。物を甜めんとする時は、舌を充分に擴げて之に接し、舌の中央に開いた細孔から、液汁を吸取るものである。吾人の皮膚にたいのは右の舌に甜められる時である。胸部は灰黄であつて、之に四本の黒條が縦に走つてを

り、翅は透明で二枚しかない。脚は黒色で毛を生じ脚の尖には二個の膜瓣と二本の爪がある。家蠅が滑かな物に止まる時は、膜瓣を粘着し、粗なる面に止まる時は、爪を用ゐるものである。故に家蠅は滑かな硝子器や禿頭などの上でも自由自在に這ひ廻り、決して脚をすべらすやうなことはない。腹部は灰黄黒色で、雌蠅の腹は雄蠅の腹よりも一層肥えて居る。

家蠅が卵子を産付ける所は、重もに馬糞である。故に厩に近い所には、家蠅は必ず多い。然し産卵の場所は馬糞のみでなく、腐敗しかつた食料品、肉類、其他肥料など

を選ぶことも少くない。

家蠅は一夏期中に十数回も産卵蕃殖するのみならず、一頭の雌蠅の一回の産卵数は、一百粒以上であるから、其増殖は思ひやられる。此卵子が



家蠅原圖

卵化すれば、所謂蛆となり後蛹となりて、蠅に化生するのである。大抵卵子が卵化して蛆を産出し、た時から蠅となるまでには、十日乃至十四日位を要するものである。蛆は圓筒形で長く丈は大抵五分前後あり、其色は白く、蛆體の頭端は尖りて尾端は太い。頭には

三
黒色の鋭齒が二本ありて、尾端には二個の黒色の楕圓盤がある。通常此楕圓盤を蛆の眼と見做すが、あれは眼ではなくて、呼吸をする孔を開いた所である。さて蛆には翅もなく脚もないから、飛ぶこともできず這ふこともできざる筈のものでないが、尙ほのたりくたりあるき廻るのは、如何なる譯であるかを調べて見ると、蛆體の腹面には、幾列となく短かな粗毛が生じて居り、體の屈伸に従ひ此粗毛を歩行する面に引掛け、或ははづして右の運動をなすことが分る。

家蠅は人體を螫したり、血を吸ふことはしないが、之に

たかられると、實に五月蠅いことは、一通りではない。之を豫防したり驅除することが必要であるが、未だに其良法を得ないのは、残念の極である。然し今日までに知られた方法を記せば、左の通りである。

鳥糞は從來使用し來たれる方法で、之を竹の皮などに塗り付け、家蠅の群集する處に横たへ置けば、家蠅は多く粘着して斃れる。

市中に賣買する蠅取り紙も、家蠅を驅除する多小の效力はある。之を使用するには、平底の器物を撮りて、其底に蠅取り紙を敷き、少し水を加へて右の紙を濕ほし置け

ば、家蠅は何時の間にか飛び來りて、濕紙に止まり斃るゝものである。硝子製の蠅取りは、世間に多く用ゐられて居り、随分多くの家蠅を捕へることが出来る。此蠅取りには家蠅を呼び入れるため、少量の酒を容れ置くが常である。粗製の蜂蜜を酒に溶かしたものは、酒よりは一層家蠅を呼寄することが多くて、之に溺れ死することが夥しい。

床屋で消毒劑として用ゐるフオルマリン液は、亦家蠅を驅除するの效能がある。之を使用するには、茶碗なり平底の皿を採り、之にフオルマリン液を水で薄くしたも

のを少し容れ、家蠅の群來する所に据ゑ置けば、家蠅は之に來集して、此液を甜め飛去る途中で斃れる。除蟲菊の粉末又は其薰烟は、蚤蚊蟻などには特に效力があるけれども、家蠅の驅除には更に效能がない。

俗に蠅打と稱へ、棕櫚の葉其他厚紙などで捲へたるものは、家蠅を打殺すに便利な器具であるけれども、勞力を要し疊や壁を汚す患ひがある。

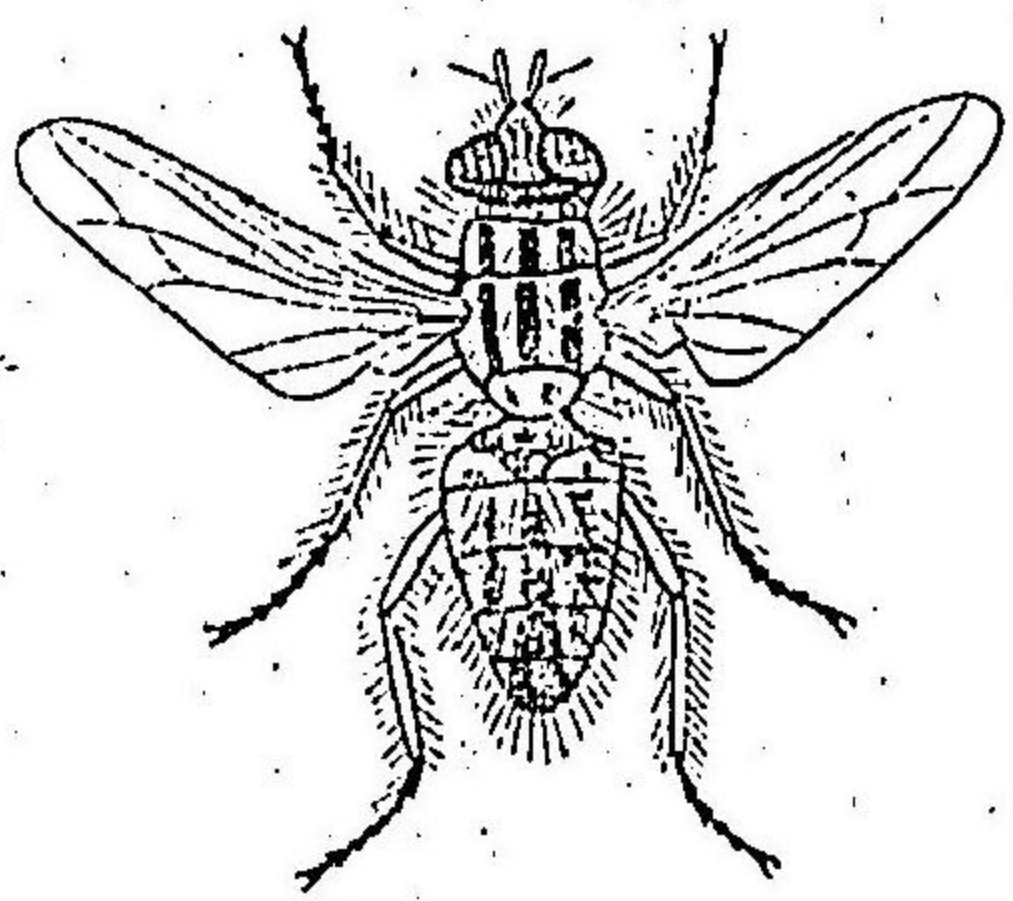
家蠅を豫防せんには、廐の掃除をなし、其蕃殖の餘地なからしめることが肝要であり、且臺所には腐敗に罹りたる食料品は放置することなく、直ちに棄つるが宜しい。

また漬物桶などの中にも、家蠅の幼蟲(蛆)が発生してのたくり廻るものであるから、右の桶には家蠅が來るも、産卵せしめざる方法を考へねばならぬ。

家蠅が晝夜の別なく來襲する所では、一層苦いこと、思ひやらるゝ。晝の中は兎に角我慢もできやうが、夜分ときは堪まるものではない。故に寢に就く時には、蚊帳地の袋を拵へこれにて頭を包み、蠅軍を防禦するよりは、他に良法はないと考へられる。

第五 人體の寄生蠅

普通の家蠅の外に、人體の内外に寄生する蠅の蛆がある。即肉蠅(サルゴフア)が、カルナリアの蛆は、人體の傷



(倍二)アリナルカ、ガ | アフゴルサ (ふ従に氏すにいろ)

口や潰傷などに寄生し、或は少女の膣、尿道などにも寄生して、患害を醸すことがある。又花蠅族の一屬にて「ホマロミア」と云へる蠅の蛆は、野菜類を食するに當て、之と共に胃中に入込むも、往々死せずして糞と共に

體外に排出せらるゝことがある。

二三年前橋本醫學博士が某患者の糞と共に、排出せる

二八
蛆を見せられたり。此蛆は火酒漬になつて居つたから、委くは分らなかつたが、多分右の「ホマロミア」蛆の一種らしく見ゆる。

「セネガル」蛆は、亞非利加の「セネガル」河沿岸に棲息する種類にして、其蛆は人や家畜の皮膚の下に寄生して、所謂蛆病を發生す。

ナタール蛆は、南亞米利加伯西爾國の「ナタール」近傍に棲める蛆にして、その蛆は亦人の皮膚下に寄生し、一種の激烈なる病原を爲すものである。

蛆病に罹りたる時は、矢張醫士の診察を受け、治療を乞ふことが肝要である。

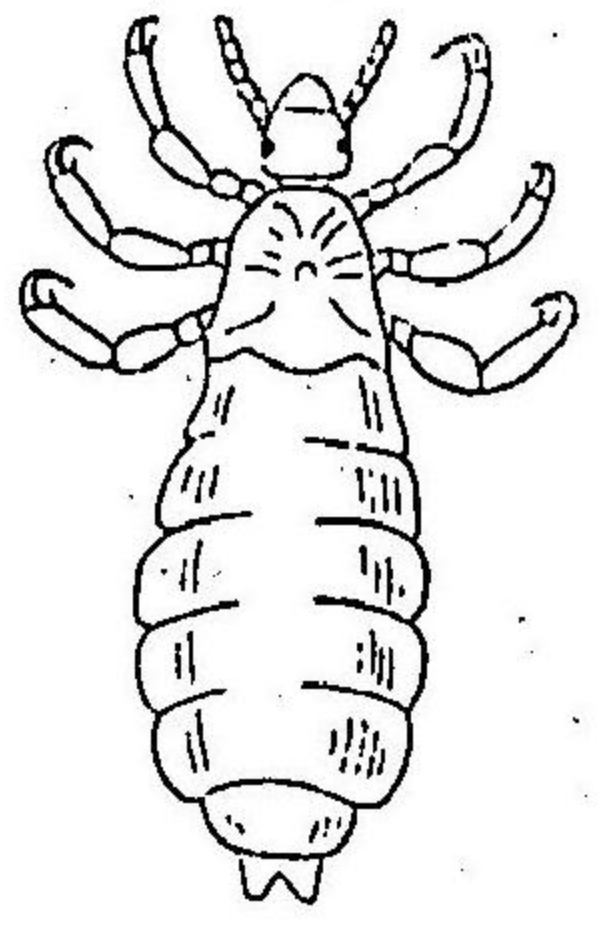
第六 虱

舉動は甚だ大膽で、泰然として動かざること、山の如しといふ觀がある。さうしてそれを見ると、ぞつとするものは虱であらう。この虱には二種ありて、一は體に寄生し一は頭は寄生するのである。

衣虱

其體は扁長であつて、頭は幅狭いが、眼のあるところは

三〇
稍や廣くなつて居る。體の着色は灰白で、皮膚にはまばらに毛を生じて居る。雄虱は常に小形で、其數は少い。雌虱は大形で、雄虱よりは遙に多數である。脚の尖には



衣虱(八倍原圖)

大小二本の爪があり、口には細く短い管を出して、吾人の血液を吸収する。雌虱は大抵一疋で、七十顆の卵を産むと云ふことであるが、其卵子は直ぐ孵化して復た親虱となり、蕃殖するのである。だから暫くの間、甚しく増殖して、吾人を悩ますことが烈しくなる。之に血を吸はれたところは著しく痒氣を覺え、之を搔い

た跡には赤點が出来て、或は痂などを生ずることがある。衣虱は身體にのみ寄生するもので、毛髮には寄生することがない。特に此虱は不潔な人の衣服の裏側に棲み、其縫ひ目、合せ目等に入りて、其所に卵子を産み付け、時々皮膚に止まりては、血液を吸収する。前にも言ふ通り、其血液を吸収した跡は、一種の痒氣を覺え、烈しく之を搔かざれば、容易に癒え難いものであるが、其烈しく搔いたところは、自然に熱氣を覺えて冬などであれば、着物一枚位ぬいだとして、別に寒氣を覺えることはない、と云ふ話である。兎に角、皮膚をかくことが烈しければ、熱氣を増すと

云ふことは疑ひないのであらう。さすれば貧乏人などでは、衣虱を體に飼つて置くのも、まんざら無益のことでもないらしい。

衣虱を除くの方法は、決して六ヶ敷いことではない、時湯に入り清潔な衣服と着替へ、垢染みた者を着なければ、それで充分驅除することが出来る。尙ほ續いて夜具蒲團なども清潔にすることが肝要である。また衣虱の蟄伏する所に、迷迭香油などを撒布するも效がある。被害の衣類は、總て熱湯に浸し、或は蒸氣亞硫酸瓦斯等で驅蟲するのも有效である。

頭虱

頭虱は衣虱よりは小形で、蟲體の兩側は濃褐色である。腹部の左右兩側には深い切込があるから、衣虱とは容易に區別することが出来る。雌虱の脚は六本共に同じ長さであるが、雄虱の脚は大形であつて、中脚と後脚とは同じ大きさで小さい。本邦の頭虱は大抵黄褐色であるが、黒奴の頭虱は黒くて、歐洲人の頭虱は灰色である。これは多分毛髪と皮膚の着色との如何に依つて、頭虱の着色が變化したものらしい。畢竟此等の着色の異なるのは、所

謂保護色の類で、皮膚頭髮の色に伴うて、變色するのであらう。

一疋の雌虱は大抵五十顆の卵子を産む。其卵子は常に頭髮の根元に附着せしめるのである。此卵子は産落した後六日を経て孵化し、三たび脱皮して再び産卵するのであつて、卵子から孵化し出た頭虱が成熟して卵を産むまでには、都合十八日を要するものである。

頭虱は老若男女の區別なく、頭髮の不潔な者には多く蕃殖して、其頭髮間をくゞりくゞり走つて居る。故に之を捕へることは容易でない。其血液を吸収した所は、小水

腫の状を成して、其項には小血痕を存する。

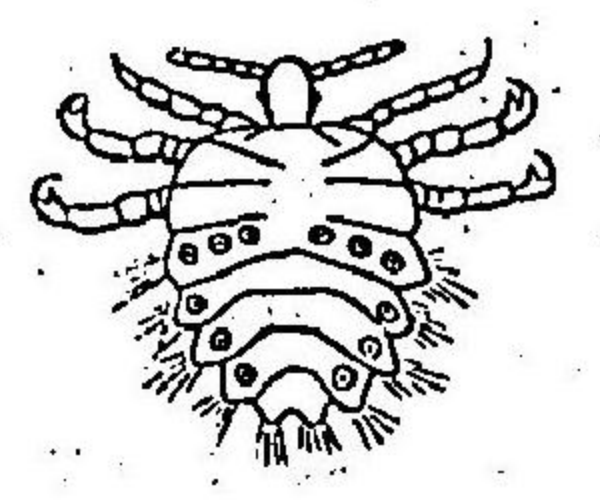
頭虱を驅除するには、髪を洗ふことが第一であつて、次で細かい齒の櫛で叮嚙に梳り、捕ふことが肝要ぢや。また水銀軟膏其他揮發油の類を毛髮の根元に塗り付けるのもよく、又蚤とり粉を被害部へ磨り入れるのも著く驅蟲の效能がある。

第七 毛虱

毛虱は「ツブシラミ」とも云ひ、腋毛陰毛等の間に寄生し、患害を爲す悪むべき虱である。その形は殆ど圓く扁平

て六本の丈夫な脚があつて、其外觀は丁度極小さな蟹の様である。脚の尖には一本の刺と、一本の鉤形をした強大の爪があるが、此刺と爪とで確かと皮膚に固着して、容易に之を摘み捕ることが出来ぬ。六本の脚の中前部にある一對の脚は、稍々小形であつて刺も爪も亦小弱であるが、餘り四本の脚は前者よりは遙に強大であつて、その刺及び爪も亦た強い。腹部の左右には數個の圓錐形の凸出したものがあつて、之に數本の太い毛が生えて居る。腹部の尖は雌雄で異なつて居る。雌虱の腹部端は少しく凹み入りて毛を生じ、雄虱の腹部端は圓まりて少數の

毛を生ずるのが常である。其身體は灰白色若くは灰黄色であるから、陰毛腋毛等の間に固着する時は、中々見出し難い。



毛虱(十倍原圖)

毛虱の舉動は甚だ不活潑であつて、頭虱の様に毛の間をくゞりぬけることはせず。爪で皮膚にしっかりと取付きながら、口で血液を吸収するものである。故に之を取除けやうと思ふ時は、爪で強く搔き起すか、小刀の尖などで刮らなければならぬ。加之此虱が寄生した所は烈しく痒氣を覺え、實に五月蠅いものである。

右に話したやうに、毛虱の好んで棲む所は、腋毛陰毛等の生じた場所であるが、尙ほ往々胸毛眉毛鬚髯内にも寄生して、蟲害を及ぼすことがある。

大抵雌虱は、一疋で十粒許りの卵子を産むもので、これを毛の根際に連ねて、産み付けるものである。卵子は梨子形で産み下した後、五、六日を経て孵化し、また十八日を過ぎた後成熟した毛虱になり、再び卵子を産み盛に蕃殖する。

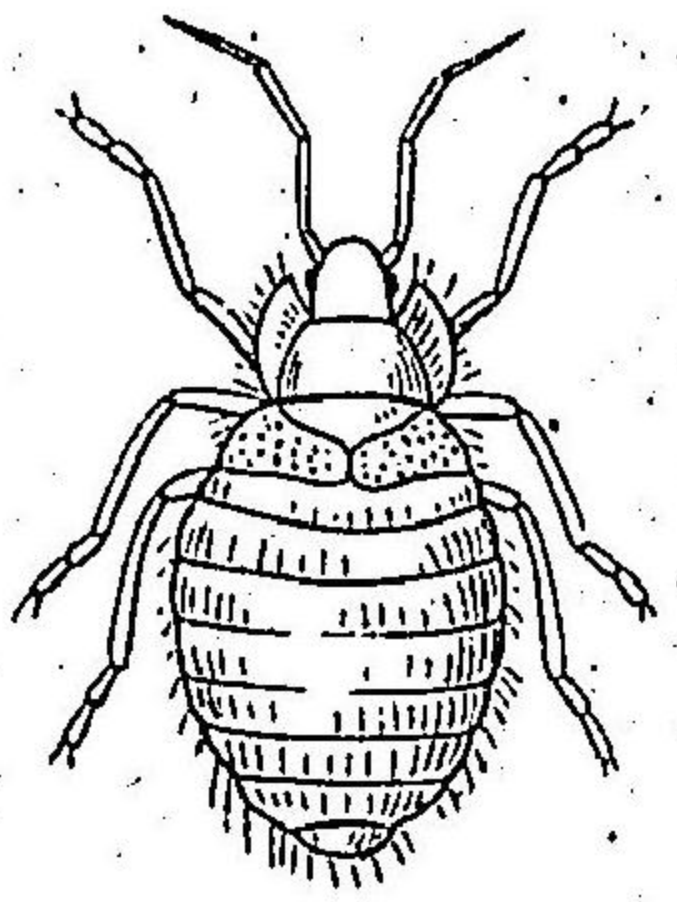
毛虱を驅除するには、被害部に水銀軟膏を磨り込み、十二時間乃至二十四時間の後、風呂に入りてよく患部を洗

へば、害蟲を驅除することが出来る。然し水銀軟膏の使用を好まぬ人は、「ペルバルサム」又は「迷迭香油」を使用し、驅蟲するも均しく效能がある。また被害の人に近接し、或は被害人の被服などを着けた時、其他放蕩に過ぎたる場合にも、間々毛虱の寄生を受けること少くない。故に此邊に注意することも、害蟲豫防の一法であらう。

第八 南京蟲

南京蟲は、「トコムシ」「トヨシラミ」又「サンダイムシ」とも稱へ、歐米諸國を初めとして、支那、朝鮮等に多く棲息し、夜

間出でて人の血液を吸収する悪蟲である。從來我國には南京蟲を見ること少なかつたが、外國との交通頻繁となつたのと同時に、いつしか輸入して、諸所の開港場・兵營・船舶等に蕃殖したために、此蟲害を受くることが次第に甚だしくなるの傾きがある。蚤虱蚊などに苦しめられる許りでも大抵でないが、この上南京蟲までが見舞うてくれば、たまるものでない。南京蟲は、體橢圓の平たい蟲であつて、長けは一分五厘位ある。着色は淡赤褐で、黄赤色の毛があり、翅はないけれども、脚は細長くて丈夫であるからよく走る。胸の左右には薄い鱗のやうなものを



(圖原)倍五蟲京南

具へ胸背には二枚の堅い薄板がある。此板は翅を代表して居るものであつて、飛翔の用は爲さぬものである。胸の裏面を見ると、後脚と後脚との間には漏斗形の孔が開いて居つて、それから悪臭のある油のやうなものを出す特性がある。南京蟲は、一ケ年に幾度も産卵するもので、毎回産む卵の数は大約五十粒許り、之を親蟲の蟄伏する所に纏めて、産み付けるのが常である。

卵子は橢圓形であつて白く、産卵後一週間乃至十日を

經て孵化し、其後七十日前後の間に五回蛻皮して、初めて成熟した南京蟲となり、また産卵するものであるが、寒暖と餌食の多寡とに依て其發育に非常な遅速がある。

南京蟲は屋内に棲むもので、屋外には棲まぬ。晝は壁、牀板、簞笥、戸棚などの隙間、合せ目、其他總て薄暗い場所を選んで之に隠れて居る。また寢臺の据ゑ付けてある室では、その蒲團の下の方に匿れ、或は疊の下などにも匿れて居るが、夜に入ると右等の潜伏所からのこゝ這ひ出て、頸筋だの手足の先きなどの蒲團の外に出た所を襲うて、血液を吸収するが、着物又は蒲團で被はれて居る處は、

侵害を免かるゝものである。また此蟲は、非常に光りを忌むものと見えて、夜分でも火を點じ置けば、決して襲來するの恐はないが、若しも火を消せば、忽ち出て来て、惱ますことが甚しい。試みに夜間燈火を消して寢に就けば、忽ち頸筋手足の先きがもつゝして来る。此時急に火を點じたらんには、南京蟲が全速力で逃げ走るのを見ることが出来る。若し指などで之を押し潰したり、捻り潰したりする時は、例の悪臭が指に着き容易に取除けない、實に心持の悪しき蟲である。
南京蟲に螫された時は、患部は團子のやうに腫上り、烈

四四
しく痒味を覚え、強く之を搔きむしれば、痛んで来る。特に此痒味は、蚊や蚤の様に一時のものでなくて、一週間以上痒味が失せぬから、心地が悪いのみならず、頗る難澁なものである。

一體南京蟲は、室屋船舶内に棲むものであるが、掃除が行届き、清潔で風通しのよい光線が程よく入込む明るい所では、南京蟲の患はないが、若し之に反した時は、それこそ南京蟲は氣儘に跋扈して、患害を加ふることが甚しくなる。本邦の居住の有様は概して清潔であつて、屋内は明るく空氣の流通が宜しいから、南京蟲に侵さるゝこと

は、少ないらしい。外國の建物は、兎角薄暗いのが多く、特に安泊りなどでは、随分不潔なものであるから、従て南京蟲が喜んで蕃殖して居る。故に立派な紳士が歩いて居つても、其頸筋や手頸などに、大きな腫物ができてをれば、昨夜は安泊りを取つたことが分かる。客船などでも同じこととて、上等の客なれば、部屋も奇麗で、清潔であるから、南京蟲に侵されることが少ないけれども、下等の客なれば、部屋は不潔で暗いから、自然其患害を受けることが多い。

右に話した通り、下等の宿屋、客船の下等室などは、南京

蟲の襲來が多いが、これは客側の不潔なためではなくて、宿屋の亭主や船員などの不行届きのためである。故に客には罪がない、また家屋などに南京蟲が蕃殖するのは、主人の監督が不行届きで、婢僕がするけた結果である。我軍隊は暑中より多く、滿洲の地にあり、此地も亦南京蟲が名産であるから、此侵害を受くことが夥しからうと思ふ。特に同地の氣温は暑中百度以上にも昇り晝は敵と戦ひ夜は安眠し疲勞を醫せんと欲するに當り、又候南京蟲の襲來と來ては、中々たまるものではない。之を豫防驅除する方法は、充分取り調べ、我征露軍をして南

京蟲の侵害を免れしめ、連戦連勝の英氣をして、倍々盛んならしむるこそ肝要であらう。

南京蟲は極暑極寒に堪ふる蟲で、よし半ヶ年位は斷食して居つても斃れることのない極めて頑固な蟲であり、加之晝は壁柱などの隙間、割目、其他戸棚、簞笥などの裏に匿れて居るが、夜になるとのこ／＼出て來るものだから、容易に目に認めることがむつかしい。従つて驅除することも甚だ難いのである。

さて南京蟲を驅除する方法には、幾種もあるが、南京蟲の襲來を防ぐと、部屋内の南京蟲を全滅するの二法に、

區別せねばならぬ。一時南京蟲の襲來を防ぐには終夜點燈し置くか又は灯火を消すとも除蟲菊の粉末(蚤とり粉の類)を敷蒲團の廻りに振り蒔くが宜しいが室内の害蟲を餘さず驅除し盡さうと思ふ時には右等の方法は餘りに役に立たぬ。是非とも部屋を丁寧に掃除し、次で種々の藥劑を使用して之を驅除しなければならぬ。また驅蟲劑は家屋の構造に鑑み之を選択せねばならぬ場合もある。北米地方其他支那などの家屋であれば床板の上を敷くことがないから四壁や床板の隙目割目等で南京蟲が好んで潜伏する所にはベンヂーン、石腦油、石油

テレピン油、番木鱈丁幾又は番木鱈丁幾二分に礮精一分を加へたるもの、或は古魯聖篤煎汁、昇汞水などを噴霧器の類で撒布すれば驅蟲上には非常に有効であるが日本風の家屋である時は右等の藥劑を使用し驅蟲することは頗る困難である。亞硫酸瓦斯は日本風の家屋は勿論西洋風の家屋に使用しても驅蟲の効力が多いことは確かである。亞硫酸瓦斯といふのは硫黃に火を點ずれば、忽ち發散する無色の瓦斯であつて、非常の毒物である。之を嗅げば咳を催ふし、強く之を嗅げば窒息するものであるから、之を使用する時は可成嗅がぬ様にせねばなら

ぬ。勿論決して之を吸込んでほならぬ。

五〇

亞硫酸瓦斯で、南京蟲を驅除せうとするには、先づ驅蟲すべき部屋の窓や戸障子を閉ち、然る後部屋の中央に丈夫な器物を据ゑ置き、之に硫黄を入れ火を點じて直ちに部屋を去り、密閉した部屋に亞硫酸瓦斯を充たして、部屋中を薰蒸するやうにするのである。大抵四五時間も過ぎたと思ふ頃、窓や戸障子を開いて、亞硫酸瓦斯を排除すれば、害蟲を充分に驅除することが出来る。但し亞硫酸瓦斯は、金物類や着色した織物類に、有害なことが多いから、同瓦斯で薰蒸する前には、よく屋内を取調べ、亞硫酸瓦斯に損ずるやうな品物は總て取出し、同瓦斯に觸れないやうにすることが必要である。

第九 蚤

蚤は虱と同様に、何れの國にも棲み、人血を吸ひ取る惡蟲の一種であつて、誰れでも能く知てをるもので、雌雄の區別までも能く分つて居る。大形の者を雌となし、小形の者を雄と見做すは確かであつて、決して間違つては居らぬ。蓋し此の區別は、常に解剖的に蚤を捻り潰し、大形の蚤の腹よりは白い卵が出て、小形の蚤よりは卵が出な

いどころより區別したるものらしい。

俗に亭主が小さくつて、家内が肥つてをる時は、蚤の夫婦と云つて居るが、よく謂たものだ。實に理屈に適つてをつて、少も間違ひがない其通りである。

さて蚤の體は殆ど橢圓であつて、左右の兩側より壓迫したるが如くに側扁であつて、着色は赤いか又は暗褐であつて、雌の長けは一分前後もあるが、雄の長けは六七厘である。

蚤の皮膚は強靱で、著しく滑澤があり、且其背面には、幾列にも粗毛を後方に向け生じてある。右の如く體は側

扁で、皮膚は堅靱滑澤で、後方に向け粗毛を生じてをるか、自由に衣服の縫目疊の合せ目などに逃げ入ることに適つてをる。頭は小さくして、猪頸の如くに胸部に接し、且頭に二個の眼と二本の鬚があつて、能く物を見もなし、感觸の働きも發達してある。口は細管と變じて、容易に皮膚に衝き入れ、血液を吸取するに適つてある。蚤には普通の昆蟲類が、具へて居る翅がない。然し其胸背には、四個の小さな鱗の如きものがあつて、翅の痕跡を示して居る。脚は六本ありて、何れも扁長で、丈夫であり、特に後脚は一層發達してあるから、跳行することが上

手である。これは蚤ばかりではなく、ばつた、こうろぎ、きりぎりす、まつむし、すゞむしの如き夏蟲類も、後脚が長いから、能く跳行する高等の動物でも、同じことで、兎や鼠や袋鼠などの巧みに跳行するのも、矢張後脚が長い爲めである。右の如く蚤は色が赤くて、跳行することが得意であるから、俗に赤馬と云つて居る。

蚤は疊裏床板の隙間、其他塵埃の積み重なりたる所を選みて産卵するものなれば、掃除の行届かね不潔な家屋の中には、蕃殖することが夥しい。又ぼろ疊を敷きたる部屋だの明き家などにて、屋内は足の踏み所もないやう

に塵埃が積り、戸や雨戸は締切つてあつて、風通しが悪く、疊は蒸せて半ば腐れが、りたる所には、蚤の蕃殖は増増甚しい。

蚤は一年に幾回も産卵するものにて、一回の産卵数は、大抵十二顆位である。卵は幅廣く桶形にて、其兩端は平たく卵殻は軟かにて、其面には無数の細な凹みがある。産卵後大抵六日前後にて孵化し、幼蟲を出だす。此者は腐敗に掛かりたる動植物質を嗜み食して成長するが、特にふけ疊や濕りたる塵埃は、大の好物の様に見受けらる。尚ほ幼蟲は親蚤の糞をも嗜み食すると云ふ。

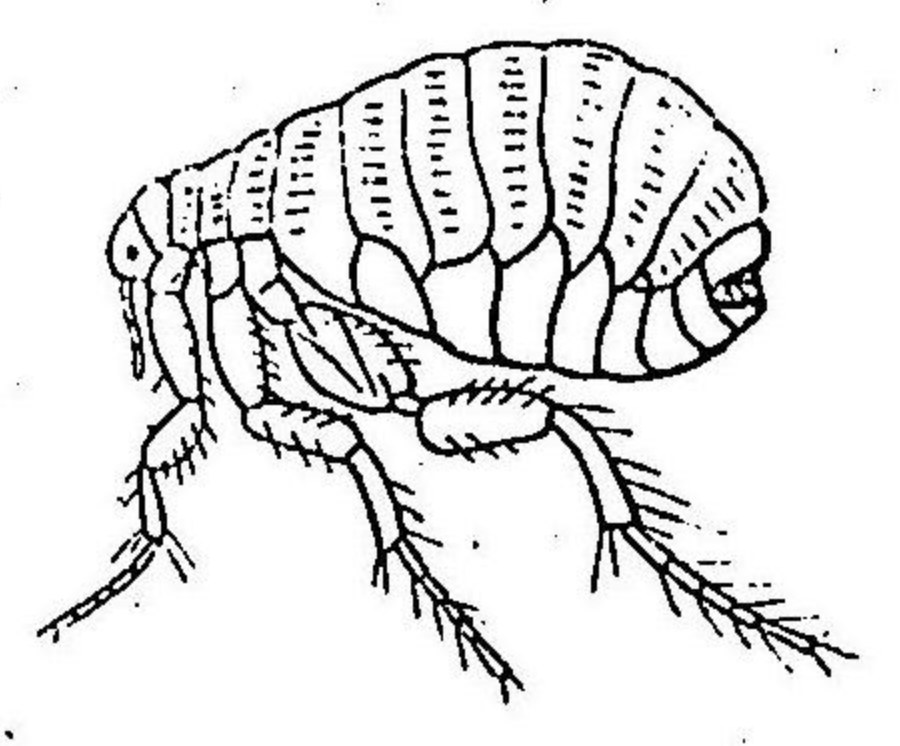
幼蟲は産出後十日前後とならば老熟し、絲縷を吐きて平たなる繭を營み、此繭内にて蛹に化生したる後、復た十日前後を経て親蚕となる。けれども温度の高低に依り、多少の遅速はあるに相違ない。

蚕の幼蟲は白くして、圓筒形をなせども、稍や平らな氣味があり、其體は十二節より成りて、其前端には小さな頭があつて、二本の鬚を生じ、口は食物を咀嚼するに適つて居る。胴部には幾列となく毛を生じ、脚はなけれど尾端の一節には、二本の刺を具へ、之に脚を代表して、歩みを援くるものである。蛹は初めは淡黄なるも、後には段々と

褐色に變ずるが常である。

蚕を驅除する方法の便利なるのは、指先きに唾を付け之を壓へ捻り潰すか、又は強く揉み、その弱りたるを待ち、板上に横へ爪にて壓殺するのである。これは誰れにも能く知られてをる方法にて、著者よりも讀者の方が遙かに經驗が積んであるに相違ない。特に此捻潰法にて蚕を征伐することになると、女子は中々巧者にて晝は勿論、夜にてもよく捕へる。男子は遠く及ばないのである。然しこの捻潰壓殺法は、少數の蚕には行はれ易いが、澤山に居る場合には、中々間に合はないと思ふ。

蚤の全滅と云ふ程には出来なないが、之を驅除するに最も效能あるものは、蚤とり粉(除蟲菊)の粉末にて製したるものである。之を着物の裏に振蒔き、或は夜具、敷蒲團などに振り蒔き置かば、蚤の來襲を免がるゝことは、確かである。若しも蚤が此粉末に振れたる時は、忽ち弱りてよろ／＼して、跳ぶことができなくなるに依り、容易に捕へ殺すことができる。室内の掃除を丁寧になし、塵埃は少しも溜らぬやうにし、風を通して濕氣を去れば、蚤を減少するに相違ない。



(圖原)(倍十)蚤

室内にて最も叮嚀に掃除すべきところは、夜具風呂と疊である。夜具は時々天日にて乾し、疊も時々上げ取りて同じく天日にて乾し、疊下の床板も奇麗に掃除し、塵埃を取去らば、蚤の減つて來ることは疑ひない。彼の傳染病豫防のため、家屋の掃除をなしたり、疊を上げ乾したりすることは、獨り傳染病を豫防するのみならず、蚤を驅除するには、莫大の效能があること、思ふ。

第十 蜂類

蜂の種類は澤山ありて、吾人に益を爲すも害を爲すも

あり、また益もなく害もなきものもある。益蜂の重なるものは蜜蜂、五倍子蜂などで、蜜蜂などは巢を造りて、蜂蜜を貯へるものであつて、蜂蜜は薬用ともなし、食用ともなし、其上蜂巢よりは蜂蠟が得らるゝから、實に有益なる昆虫であるが、若しも蜜蜂の巢を荒したり、又は巢の側に佇み、蜜蜂の機嫌を取損ふ時は、忽ち飛び來りて頭部、顔面、手足の區別なく、衣服にて被はれぬ所に止まりて、其腹端にある螫劍にて螫し、患害を加ふる蟲となる。赤翅蜂の如きは蜂蜜を供給することなく、何等の益もなさず、只だ其益することは、其巢が酒屋の看板位になるのと、少しく害

蟲を捕食するなどが、關の山である。此蜂は好んで熟したる甘味の果物類に聚りて、其果肉を食したり、果汁を吸つたりするから、園藝家には容易ならざる害蟲である。加之子供等が其巢を毀ちたり、或は果物を採らんとする時などには、赤翅蜂の爲め、往々頭手足等を螫され、苦むことが少くない。さて吾人が蜂類に螫されて痛みを感じるのは、ただ螫劍を皮膚に衝入れたるのみではない。螫劍と共に一種の毒汁を、傷口に注入するためである。蜜蜂、赤翅蜂などに螫されたる時は、其傷口に押し潰し

たる胡蘿蔔、林檎、梨等の果肉、菜葉、其他、濕りたる畑土又は砂を塗抹すれば、疼痛を治するものである。特に畑土は何所にても容易に得られ、疼痛を治するに最も效能がある。

礫砂を傷口に塗つたり、鉛醋にて傷口を繃帶するも宜く、また馬鈴薯の薄く環切りにしたるもの、或は銅貨にて傷口を壓へても、疼痛を治するものである。

第十一 蛾類の幼蟲

蛾類は重に夜間に飛出る蟲であつて、幼蟲とはそれの

子である。譬へば蠶兒は蠶蛾の幼蟲で、柚蟲はアケバ蝶類の幼蟲であるが如くである。

幼蟲類の中にて、人を螫し患害を加ふるものは少くない。特に刺蟲、松毛蟲、其他種々の毛蟲類を摘みたり、又は之に觸れたる時は、其皮膚に生じてある毛、刺毛等は、忽ち皮膚を螫して劇痛を起し、或は脹らし、或は甚しく痒くなり、不快に感ずることが間々ある。此毒性ある毛、刺毛等を撮り、篤と調ぶる時は、皆空洞にして其尖には小なる孔を開き、毛の付元には毒腺が横りてある。若し人が右等の有毒なる昆蟲類に、誤て觸れ、或は接する時は、其毛は忽

ち皮膚を蝥し、毛尖に開きたる細孔より、毒質出でて傷口に入込むが故、これがために疼痛や痒氣を覺え、或は焮衝して腫れふくれることがある。

此毛毒を治するには、種油類軟かなる脂膏類若くは、礮精の稀薄なるものを塗れば、治するものである。

是より以下の分は昆蟲類ではないが、昆蟲類の親類で、矢張人に患害を及ぼすものであるから、茲に述ぶることにした。

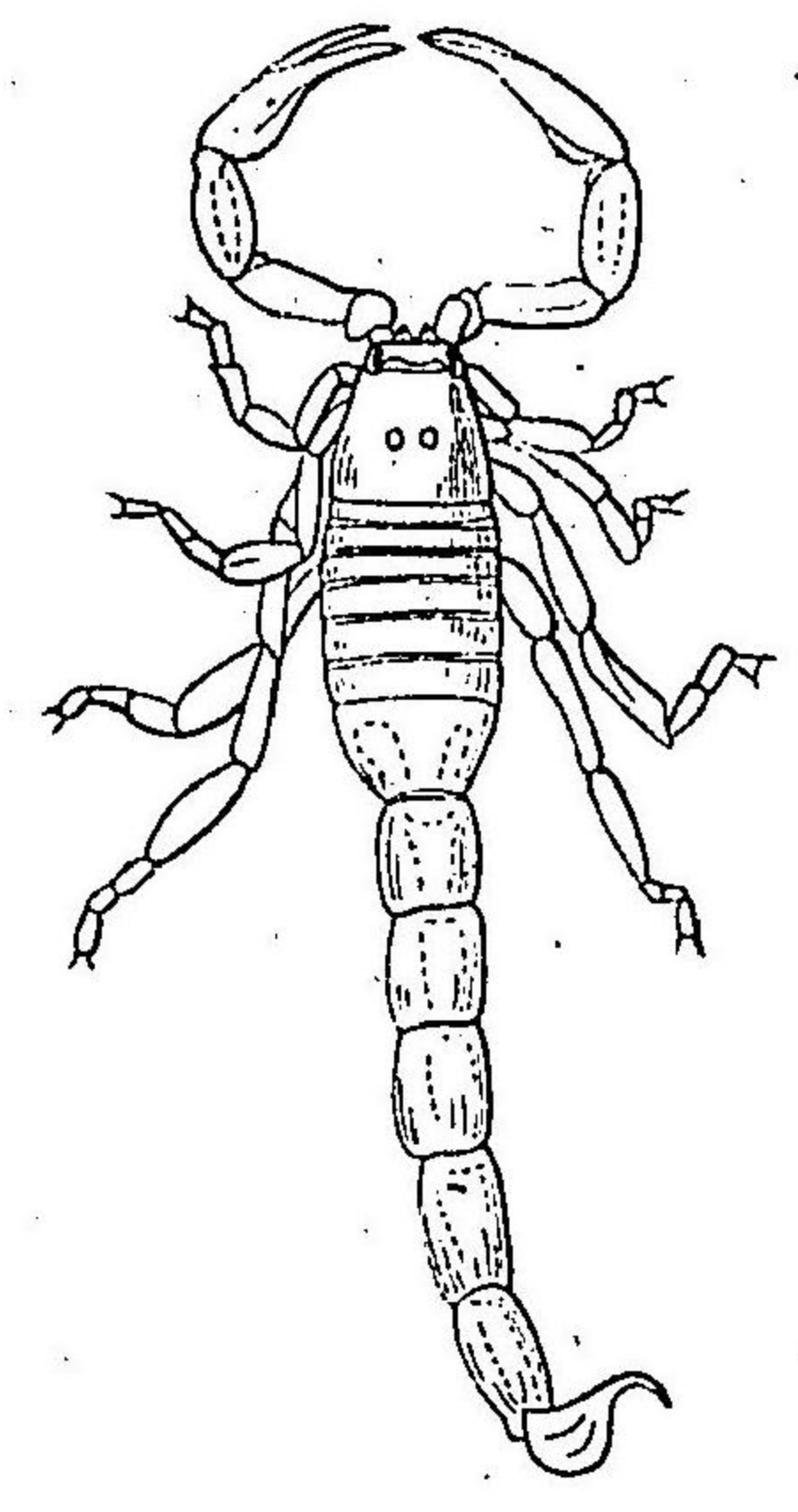
第十二 蠍

蠍は「ジャムシ」とも云ひ、全歐とも云ふ。萬尾蟲、渴沙、蠍子等の名がある。往々人の忌み嫌ふ者の例に擧げられる動物で、蛇蠍の如く嫌ふとか、蛇蠍視するとかと云ふことは、書物、新聞などに記る、さること多し。蛇蠍の蛇はへびに極つてをるが、蠍の字に至つては「サソリ」と訓するも、此「サソリ」は如何なる動物であるか、之を熟知するものは少からうと思ふ。

蠍は何れの國にても、温暖なる地方に棲息するものにて、隣國の清國には多く棲息し、人を惱ますことが少くないと云ふ。

本邦には幸にして、この蛇蠍しきるゝ動物が先づ居らないと云つて宜しからう。然し長崎には此動物に「ジャムシ」と云ふ方言がある。して見ると長崎には清國の船舶に依り此動物を輸入し、之を見たる人も随分あるらしい。明治二十七八年の役に、某軍人は此蠍を火酒漬となし、清國より携へ歸り余に示したるものがあつた。左れば清國に行かば「サソリ」は珍敷ものでなく、普通のものにて誰にても之を見たり捕ゆることが容易いに相違ない。「サソリ」は先きに述べたる通り、昆蟲類の親類で蜘蛛に類似してをるが、體軀は長橢圓で太く長き尾の如きもの

がある。體軀は前部を爲せる頭と胸とは合併して一部(頭胸部と云ふ)となり、其前面には口を開きて、其側には大小二雙の螯があり、頭胸部の脊面に數對の眼がありて、四



リソサ 雙の脚がある。細長き尾の尖には一個の毒刺ありて、之に毒質を漏出する二個の細微なる孔が開いてある。雌雄の

區別は、尾と螯にて分る。雄の尾は雌よりは長くして、螯の幅が廣い。蠍は胎生にて胎生したる子は、皆其體に着

け保護するものである。

晝は石の下だの朽木の下だの壁の隙間だの總て暗き所に匿れて、人目に觸るゝことがないが、夜になると徐々其隠家より這ひ出で、昆蟲類や蜘蛛類を捕食するのが常である。

「サソリ」が夜間に這ひ歩く時は、毒刺のある尾を上方に折曲げたり、或は横に向け、昆蟲や蜘蛛に出會つた時は、直に螫にて之を捕へ、體より上の方に持ち上げ、後方より毒刺にて之を螫し、其衰弱するを待ち、口に接し、其體液を吸つたり、或は細かに咬み碎きて、食するものである。固よ

り、蚤や蚊の様に、人血を吸ひ取ることは爲さないが、若しも「サソリ」の多く棲息する所に、野宿などをなし、焚火を爲すが如きことある時は、種々の昆蟲類と共にぞろ／＼這つて來ることがある。これはまだしものこと、場合に依りては家宅に入り込み、夜具着物の中にも這ひ入るものなれば、人體に近づき易い。若しも此惡蟲に人體が觸る時は、忽ち其尾尖にある毒刺にて、ところ嫌はず螫すものである。毒刺にて螫されたる傷口は必ず毒刺より漏出する毒質を受くるがため、忽ち焮衝を起し、疼痛が甚しく、憂悶に堪へられないと云ひ、或は發熱することもある

と云ふ。實に惡むべき動物である。

「サソリ」に螫されたる時は、其患部に礮精を塗抹したり、又はサソリ油と稱へ、橄欖油に「サソリ」を浸したるものを塗抹するも、疼痛を治するの效能がある。

亞謨尼亞烟草の灰なども、之を傷口に塗れば、腫れも痛みも癒ると云ふ。

第十三 疥癬蟲

疥癬蟲は平たい殆んど橢圓なる小さな蟲にて、雌雄の區別がある。雌は雄より大きくして、其長けは一厘餘で

ある。雌雄は何れも體の周りには、細かなる凹凸があり、四對の脚を具へて居る。雌蟲に於ける第一と第二對の脚の尖きには、吸盤があるも、第三と第四對の脚の尖きには、吸盤はなくて長い毛を生じてをるが、雄蟲にては第一、第二、第四對の脚尖には長い毛を生じてをり、只だ第三對の脚の尖きにのみ、吸盤を具へて居る。

疥癬蟲は、皮膚の下に、縦横にトンネルの如き蟲孔を穿ち、其孔の止まる所に雌蟲が居つて、盛んに産卵すれば、四日より八日の間に孵化して幼蟲となり、幾回も皮をぬぎ、て再び老成の疥癬蟲となり、交尾して復た産卵す。疥癬

七二
蟲が皮膚に寄生したる時は、痒氣が甚しいから無暗に爪にて搔きちらさざるを得ない。左すれば疥癬蟲の親子が爪指に着き、或は衣服に着きて、他人に傳染する故に、疥癬患者には可成接せざるが宜しい。若し不幸にして之に罹りたるならば、醫師の治療を乞ひ、害蟲を驅除し、速かに治するに如かない。

第十四 水蛭

水蛭は水中に棲むものであつて、其種類は少くないが、水田や沼や溝などに棲むものは、往々人の脚に吸付き血

を吸ひ取り、惱ますものである。殊に素足にて水田に入り働く時は、水蛭の害に罹ることが多い。だに依て、水田に入る時は、重に股引脚半を着け、害を避くる慣習がある。是は中々行き届いて居る方法である。右の如く水蛭は吾人に對して有害なるものではあるが、吾人は其血を吸取する特性を應用して、薬用となすことがあるから、害物を有益に使用することが出来るのである。

水蛭は誰れにも知られてをるものであるゆゑ、蛭を他の者と見違へるやうのことは決してないが、水蛭の體や繁殖の事に就きては、鳥渡分り悪いところもある。さて

水蛭の體は平らにして長く水中をひらくと泳ぐ具合
七四
ひは餘り心持のよいものではない。水蛭には別に頭と
名くべきところは判然しないが、體の前端は稍や細くし
て口が開きてありて、三枚の平らな齒の如きものがあり
て、尙ほ其背面に數個の小眼がある。唇は丁度章魚の疣
の如くに、確と物に吸着するのに協つてをり、齒と齒との
間より血を吸込むものであるから、齒と齒との間は人字
形となつて、血を吸はれたる皮膚の面に残るものである。
また水蛭の尾端を見れば、前端よりは遙に太くして、こゝ
にも亦一個の圓き疣があつて、好く物に吸着して容易く

離れない。此疣は只だ吸着するのみであつて、血を吸ふ
ことはしない。水蛭は卵生であつて、其産みたる卵は、楕
圓の袋に入れ、此袋を水中に存ずる、砂礫や朽木や落葉な
どに固着するものである。

第十五 山蛭(草蛭、タニビル)

山蛭は水中には棲まずして、陸に棲める種類である。
體軀は殆ど圓筒形で、頭端に向て次第に細くなつて居る。
着色は暗黄褐であるが、腹面は着色淡薄にして濃灰褐の
點紋を存じて、體長は大約一寸五六分位もある。

山蛭は山中に棲むものにて、里には決して棲まはない。山にても、兀山には棲まないが、深山幽谿と云ふやうなところ、で、濕りたる草原の中だの、谷川筋の雑草中に棲み居りて、山中に入込む人の脚に吸付き、血を吸取る悪むべき蛭であるが、ただ人血のみを吸ふのではなくて、牛、馬、野猪など、にても、山蛭の棲めるところに通り掛れば、遠慮なく之に吸付き、血を吸取るものである。

さて山中に入込む時には、いつの間にか山蛭は脚半や股引などの下に入りて血を吸ふ。山蛭が皮膚に吸付く時は一向に感じがないが、さあ山蛭が腹一ぱいに血を吸

ひ皮膚から離れたる時は、血が流れ後には少しばかり痒氣を覺ゆるから、山蛭に血を吸はれたることが分かる。山蛭の嗅感は中々するどいものにて、若し人が山蛭の棲める近所を通る時は、丁度尺蠖の如く體を環にしては伸し、進み來りて脚に取付く。其進行する有様は中々速かであつて、心地の悪いことは一通りでない。山蛭の多い山谷を往來する者の話を聞くと、山蛭は木より落ち來りて吾人の脚や手に吸付くものなりとするも、此者は木に棲まはない。矢張濕りたる草叢中に棲み、いつしか脚半などに取付きて居るが故に、木から落來りて取付いたる

が如き觀念を抱くのである。

山蛭が手足に吸付きたる時は、之を取離すことは容易でない。無理に之を取離さうとする時は、體が切れることがある。斯くて山蛭は充分に血を吸ひ満腹する時は、自ら離るゝものにて、離れたる時には血の流れ出づることが甚しくして、後には痒氣を覺ゆる。その傷口は中々癒えないものにて、一時痒氣は去るも雨天の際には、又々痒氣を覺え或は傷口はかさぶたとなりて、一ヶ月位は癒えないことがある。右の如く山蛭は血を吸取ることは、中々上手であるが、跡に遺れる傷口は容易に癒えない

ものなるが故に、醫療用には爲し難い。

山蛭の棲める山路や谷川筋を往來する者は、此山蛭に襲はれないやうに、注目することが肝要だ。之を豫防するには、腿引、脚半、足袋を着け、山蛭が襲ひ來るも容易に皮膚に接せしめざることが肝要であり、また手頸、頸筋などにも山蛭が吸付きをるや否や、時々調ぶることも肝要である。

第十六 有鉤條蟲

有鉤條蟲は俗に「サナダムシ」と云ひ、人體内に寄生する

害蟲である。其形は丁度白き眞田紐の如くであつて、八百の平な節が連なりて體をなして居る。其前端は次第／＼に細くなりて、其尖には止針の頭程の頭があつて、之に四個の章魚の疣の如き吸盤と二列に環生する鉤がある。此吸盤と鉤とにて人の小腸の内側に固着し、體の全面より養分を奪ひ取るが故に、幾ら滋養物を食つても條蟲に馳走するのみで、自分のためにはならないものである。

有鉤條蟲の子は、豚肉内に潜伏するものであるから、若しも豚のなま肉や、なま糞の豚肉を食する時は、腹内に入

りて成長し、眞田紐の形となる。その體を成せる節の中には、數多の卵子と精子とを産生す。右等の生殖素にて充たされたる節は、漸々切れて大便と共に、體外に出るのである。

有鉤條蟲が體内に寄生する時は、嘔吐、下痢等を催ふし、腹痛を起し、或は種々の神經的變狀を呈するものである。條蟲を腹内に生じたるや否やの鑑定は、肛門より條蟲の數節が排出することにて出来る。右等の場合にも醫者の診斷を受け、服藥して害蟲を除くことが肝要である。但し之を肛門より排除するも、例の止針の頭の如き頭は

腹内に止まる時は、又々此頭より幾多の節が生じて、再び眞田紐を製するものであるから、頭が肛門より排出せるや否やを確むることは最も必要であり、且豚肉を食する時に當ては、充分に之を煮て條蟲の子を殺した上にて、食さねばならぬ。

第十七 裂頭條蟲

裂頭條蟲は亦俗に「サナダムシ」と稱へ、有鉤條蟲と區別することがないが、學問の上から取調べて見ると、大いなる違ひがある。此條蟲も矢張人體内に寄生するものに

て、本邦人の重にも患ふる者は、此種類である。其形は矢張眞田紐の如くであつて、長けは一丈六尺乃至三丈で、體を成せる節の數は三四千許もある。其前端は細長く、絲の様に伸びて、其尖きには橢圓の頭があつて、之に二つの長き吸盤がある。此條蟲の子は淡水の魚類特に鱒などの肉内に宿せるものなるが故に、之を刺身となして食つたり、或はなま煮の肉を食つたりする時は、腸管に入りて發育し、矢張頭の吸盤にて腸壁に吸着し、體皮を透して養分を吸取するものである故、鱒の多い所にては、必ず此條蟲の害に罹るものが多い。此條蟲を腹内に寄生したる

時は、食慾が少くなつたり吐いたり腹痛を起したり下痢
することが普通である。

裂頭條蟲は腹内には充分に成長する時は、數個の體節
は連りて、肛門より排出せらるものであるから、容易に其
寄生に罹りたることが分る。此條蟲が肛門より出掛か
りたる時には、杉箸などにて捲取れば、随分多く抜き取る
ことは出来るが、頭は容易に取出すことが出来ない。此
頭が腹内に残りたる時は、又々之より幾多の體節が生じ
て眞田紐が出来、驅除することが六ヶ敷い。此寄生を豫
防するには、鱒などの刺身は食はぬが宜しい。又は服藥

して條蟲の體は勿論、例の頭を取出し再び患害に罹らぬ
やうにするのが肝要だ。

第十八 蛔蟲(はらのむし)

蛔蟲には雌雄の區別があつて、雌は一尺前後もあるが、
雄は八寸前後しかない。其形は圓筒の如くにして長く、
前端は細くして口を開き、尾端は少く太くして、其側に肛
門が開いてある。

蛔蟲は吾人の小腸内に寄生するものにて、何れの國に
も見ることの出来る蟲であつて、老幼共に侵さるゝもの

であるが子供には最も多く発生するものゝ如くである。其寄生をなせる個数は通常三四疋であるが罕れには數十疋も寄生することもある。

蛔蟲が腹内にできたる時は嘔吐下痢腹痛頭痛食慾を減ずることが普通である。此者が腹内に入込む方法に就きては未だ充分に分つて居らぬ。然し食物より來たと云ふことは確であるから食物は可成清潔になし糞焚きを叮嚀にすることは之を豫防するに最良の方法である。

第十九 蟯蟲

蟯蟲は細い小さな蟲にして人の大腸内に寄生するものである。雌蟲は長けが三分許もあるが雄蟲は長けが一分三四厘位である。此蟲の根據地は大腸であるが肛門の近くにも多く寄生し其食とするものは糞汁である。蟯蟲は重もに子供に寄生し成人には之を寄生することが少ない。此蟲は實に面白きものにて毎夜九時十時の頃になると肛門より這出て二三時間も過ぎなば再び肛門の内に這入る特性がある。肛門より這ひ出でたる時は其周りは甚しく痒氣を覺ゆるが常である。何のた

めに毎夜肛門より這出づるものなるや、其理由は分らないが、まさか運動するためでもあるまい。只だ肛門を入するのみならばまだしものこと、事に依ると婦女子などでは、陰部より腔内に入込むこともある。

此虫害に罹りたる場所には青紫色の小斑を生じ、或は痒氣を覺ゆることが甚しい。

此虫害を豫防するには、先づ衣服や夜具類を清潔にするが宜しい。なぜと云ふに、夜中肛門より這出でたる蟲は、衣服や夜具類に付き、從て其蟲卵は自然口中に入込む機會が多いたためである。また人の群居する所には、往々

蟻蟲の患者を出すことがある。これは一人たりとも患者があれば、夫れより他に傳染するがためである。但し蟻蟲に侵されたる時は、醫師の診断を乞ひ服藥するが肝要だ。

第二十 チストマ

「チストマ」は條蟲と同部類に屬するものにして、人體内に寄生する害物である。其形は條蟲の如く眞田紐の形をなすことなく、體は扁長にして、恰も小さな木の葉の如きものであり、其前端と中央には各々一個づつ吸盤を

存して、前端の吸盤の底には、口が開いてあるも肛門はない。此蟲の種類は中々多くて、何れも人體其他諸動物の體内に寄生するを常となして居る。就中肝臟「ヂストマ」肺臟「ヂストマ」などは、吾人の體内に寄生して、患害を加ふるものである。

肝臟「ヂストマ」は人の肝臟内に寄生し、種々の病徴を現はすものであるが、大抵此蟲の寄生を受けたる肝臟は、膨脹するが常であり、且罹病の初期には差したる病徴はなきも、病が進めば往々甚しく下痢を爲す、或は著しく食欲が減じたり、或は黄疸になると云ふ。此蟲病は從來岡山

縣下に流行し、患害に罹ること敢て少くない。

肝臟「ヂストマ」に侵されたるの病徴ある時は大便を検査することが必要だ。若し此害蟲を寄生したるに相違なき時は、便中に害蟲の卵子を見出すことが出来る。

肺臟「ヂストマ」は殆ど圓筒形にして、其兩端は圓く着色は赤い、其長けは三分三厘までである。岡山熊本、東京等を初めとし、臺灣などにも此蟲害に罹る患者がある。此害蟲は名稱の如く、人の肺臟中に寄生するものである。患者は咳を發し、着色したる痰を吐く特徴あり、此の痰を調べ見る時は、痰中害蟲の卵子を見ることが出来る。

是亦醫師の治療を乞ふが宜い。

附 除蟲菊

除蟲菊は菊類の一種にして、其花には白と赤がある。花は奇麗であるから、庭園の飾りとなすも差支へはない。此菊は驅蟲に奇效があつて、蚤、蚊、家蟻等を初めとして、野外に居る害蟲類を驅除することが容易である。此菊の驅蟲劑として、最も有效なる所は花であつて、葉と莖との效力は、花に及ばない。また赤色の花の驅除效力は、白色の花に及ばないものである。さて花、葉、莖等驅

蟲劑に製する方法は、之を刈取り陰乾しとなすか、又は相當の乾燥器にて能く乾燥したる後粉末となしたのである。此粉末には一種の臭ひがある。此臭ひが害蟲類を驅除するに、非常に有効の者である。故に此臭みが薄らぐに従て、驅蟲の效能が減ずる。之を減ぜぬ様に爲すには、此粉末を相當の器物に容れ、密閉して貯へねばならぬ。花より製したる粉末は、驅蟲の力が強く、葉莖にて製したる粉末は、其力が弱い。依て有効確實の驅蟲粉末ならば、花のみにて製せねばならぬは、勿論、尙ほ白色の花を使用することが、肝要である。また花、葉、莖等の粉末は、可成

細かになすべし。粉末が粗なる時は驅蟲の効力が少なく、細かにすればする程其効力が増して來るものである。加之極めて細かなる粉末なる時は之を害蟲に振り蒔くも群なくよく撒布することの出來る便利もある。蚊類を驅除するには乾燥したる葉莖等を焚き發散する薰烟を用ゐても宜く、また花のみの粉末の薰烟ならば、一層驅蟲の効能が多い。

また除蟲菊の粉末を火酒に浸し、之に幾倍の水を加へて稀薄ならしめ、噴霧器にて害蟲に振り掛くるも、驅蟲の効能があるが、是れは野外に於ける害蟲に使用するが宜

しい。

又モール液にて、除蟲菊の粉末に他の藥品を加へ、二種の合劑を製し、驅蟲の用に供するも、中々驅蟲に有效である。

此モール液の製法は左の通りである。

除蟲菊の花二十六匁を撮り、之を粗製火酒(五拾二匁乃至六十五匁)と安謨母尼亞液(二十匁八分乃至二十六匁)との混合液に浸し置くこと、數日にして後ち清水(八合乃至一升)を加へ、砂皿の上にて一晝夜許り煖め、之を冷しこれを漉さば、暗褐色を得るものである。これを

蟲毒液精と稱へる。

九六

此蟲毒液精七匁八分に五合五勺の水と、六匁五分の石鹼を加ゆれば、モール氏液ができる。

除蟲菊は種子と株分けとにて繁殖すべく。種子は春秋の兩季に普通の苗床に播きて發芽せしむる。秋季に播種し苗が出づれば、寒氣を恐るゝが故に、霜除けを爲さねばならぬ。翌春に至り苗の稍や成長したる時は、畑地に移植すべし。また播種は春季に於て爲すも宜し。種子の發芽は常に齊一でなくて、實に不同である。其發芽の早きは一二週間であるが、遅きは半ケ年以上にも

なることがある。故に播種後久しく發芽せざるも、別に憂ふるに及ばない。

苗は能く耕したる畑地に、幅尺五寸位の畦を設け、之に植付け春秋二回に施肥せねばならぬ。肥料は人糞、尿、堆積、水肥などが宜しい。

人體の害蟲終

印刷所京橋區築地三丁目十五番地帝國印刷株式會社

著作者 佐々木忠次郎 赤坂區青山南町六丁目百三十番地

發行者 大野富士松 神田區小川町十三番地

印刷者 中野鏝太郎 京橋區南小田原町二丁目九番地

明治三十七年十一月二日印刷

明治三十七年十一月五日發行

定價金參拾錢

著作權所有

發行所

神田區小川町十三番地

雙輪閣



賣捌所

神田區小川町十三番地

大野書店

187
352

士 博 學 理

著 氏 郎 太 篤 藤 伊

本草の用藥

本草の毒有

(刊 近)

全 壹 冊
定價金參拾錢

(刊 近)

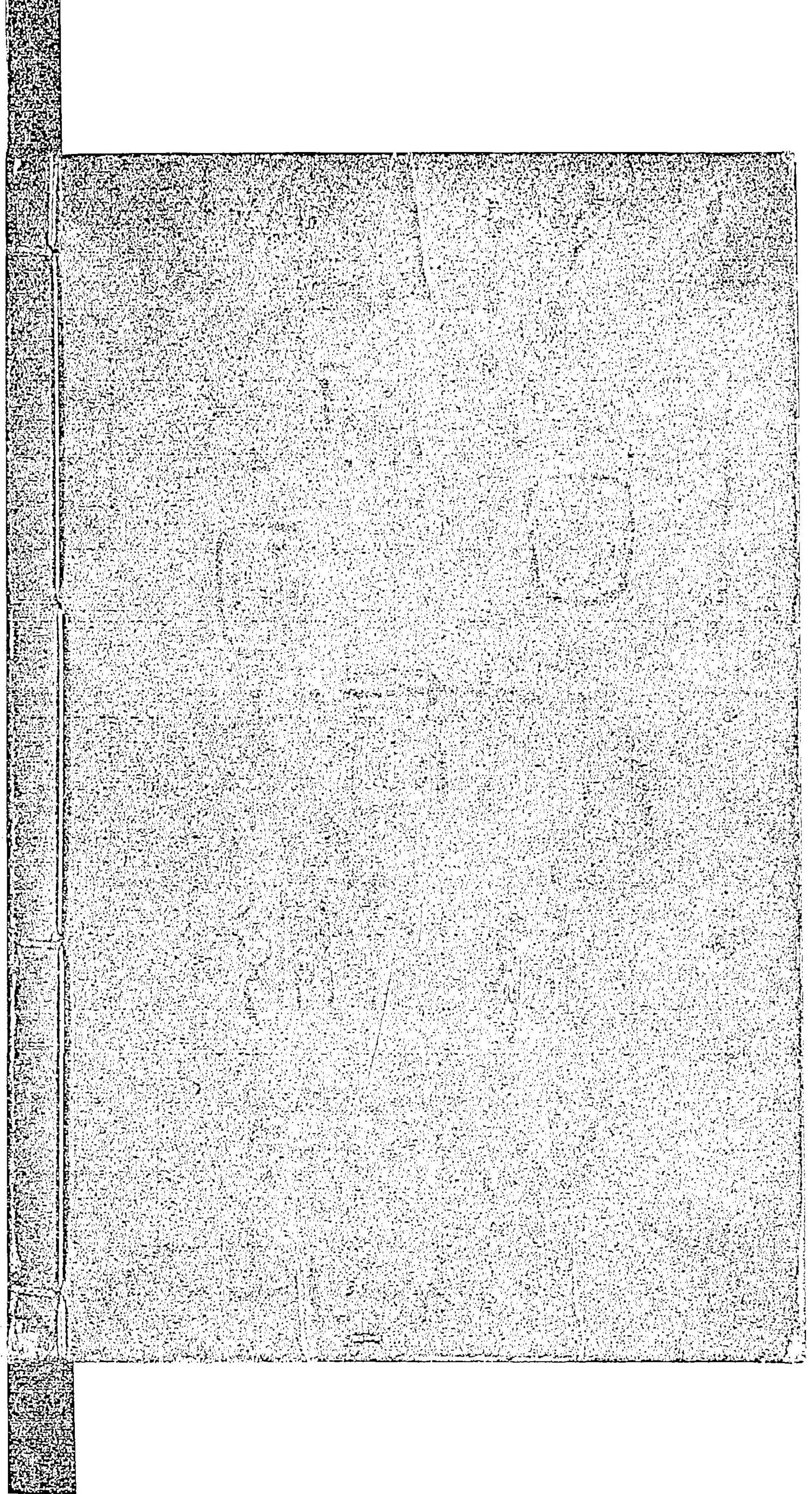
全 壹 冊
定價金參拾錢

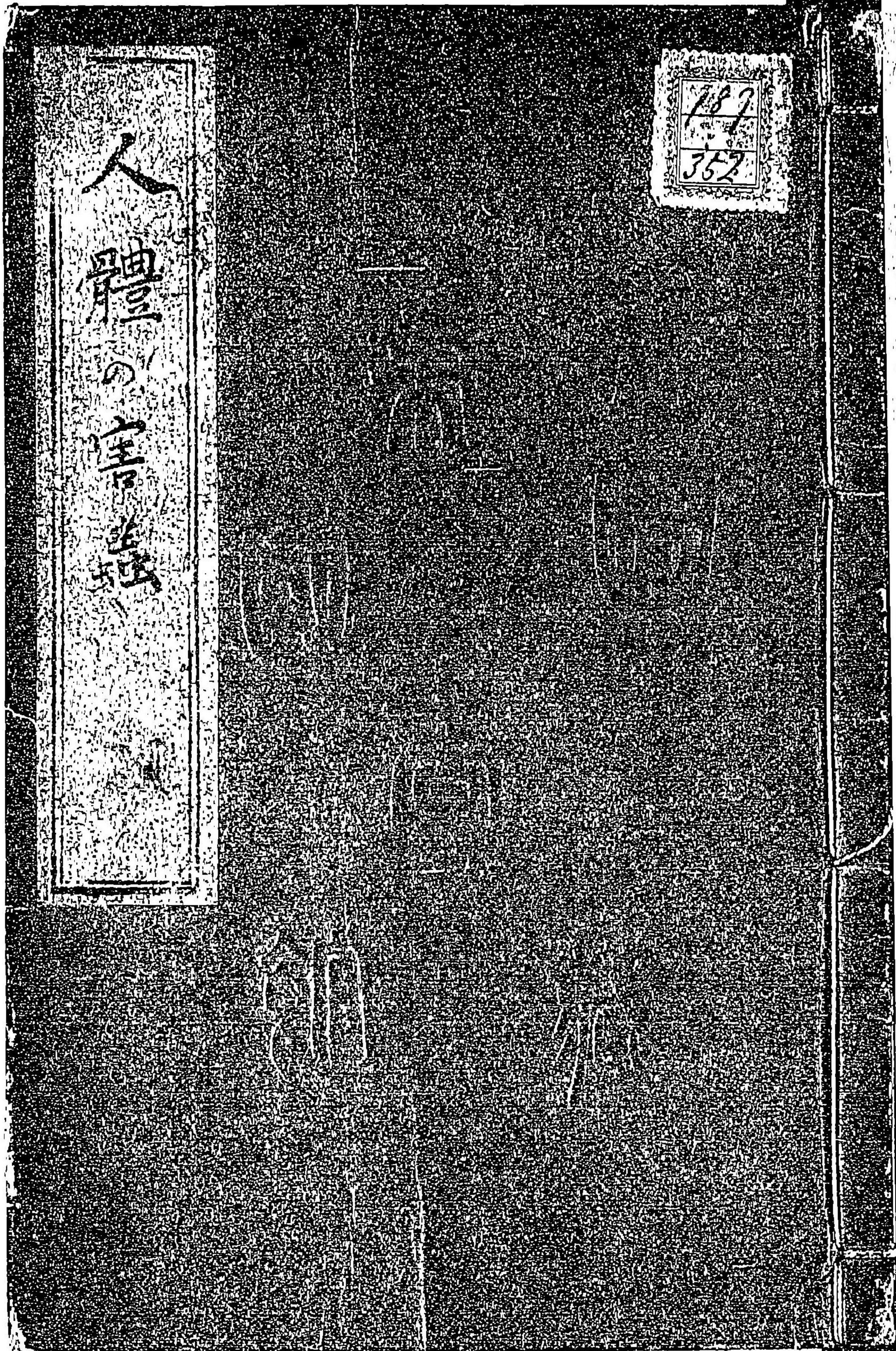
草木にも有毒と薬用と兩様ある何人もこれを知らねばならぬそのうちでも毒のある草木のおそるべきは御子さんがたが守子につれられて御庭なり道傍なり又は野外なりに御遊びの時に花の奇麗や葉や枝の奇麗に見とれて折りとり頑是なく口にくはへる採はあり勝のことであるそれを何も知らない守子に大切なる御子さんを御預けなさるゝは危険も亦甚しい左様な所から守子にはこの様な草や木は毒である御子さんの手に觸れてならぬといふことを知つて貰ひたい又御母上様よりも守子に教へて戴きたい毒のある草木はどこにあるか分らない薬になる草木も亦どこにあるか分らない箇様なことは自然界の安慰はとも得られませぬ否安慰どころかこの花鳥風月に富む我國にありながら天與の逸樂を空ふするのであるされば毒のある草木を知りますと同時に藥になる草木はどの様なものであるか何人も知らるゝ必要がある

大野書店發賣

187
352

[The right page of the manuscript is filled with dense, illegible text, likely bleed-through from the reverse side. The text is organized into approximately 25 horizontal lines, with some faint vertical markings that may represent a table or list structure. The overall appearance is that of a highly detailed and densely packed page of writing.]





203955-000-5

187-352

人体の害虫

佐々木 忠次郎 / 著

M37

EDW-0195

